


第2章

モデル事業の実施・検証



I. モデル事業に取り組むにあたって

1. 令和2年度までの取り組み

平成29年―30年度期に実施した若者施策の評価検証では、身近な家族や所属する学校や職場以外でのコミュニケーションの希薄さ、地域活動や社会貢献に関心を持ちながらも参加機会に結び付いていない現状、「コミュニケーションの頻度」と「自己肯定感・自己有用感」の間に相関関係があることなどが分かった。

令和元年―2年度期は、テーマである「若者の力が活きる地域～意見表明・参加・参画を中心に」の検討にあたり、若者世代を取り巻く現状や若者が抱える多様な課題をふまえて、若者が日常的に意見表明できる地域社会の実現のために、大人に必要な要素・若者が安心して意見を言えるための場づくりについて委員間で意見交換を行った。

若者が日常的に意見表明できる地域社会を実現するためには、若者が安心して意見が言える場が必要であると考え、継続的・発展的に取り組める若者のための場づくりについて検証するため、以下のとおりモデル事業を実施することとした。

- ・日常と異なる空間での体験・地域の方と共につくる居場所・居場所をきっかけとした新たな仲間づくり等を目指す「学校」におけるモデル事業。
- ・地域の人や多世代との交流・職場体験や社会体験・誰かの役に立つ経験・自分の意見が反映される・商店街を若者視点で盛り上げるための場所づくり等を目指した「商店街」と協力して実施するモデル事業。
- ・非日常感やライブ感・普段と違う自分が表現できる・テーマによって参加者が変わる・多様な人が集まること等を目指す「イベント」モデル事業。

以上、3つのモデル事業を仮説的に組み立てた。

学校モデル事業は、新型コロナウイルスの影響により、学校が休校となり、学校内居場所カフェの取り組みを実施することが困難となったが、感染症の流行が落ち着いた後、再度モデル事業の取り組みを行うことを念頭に、西東京子ども放課後カフェや、田奈高等学校でのぴっかりカフェを視察、またはオンライン取材することにより、学校内居場所カフェを実施する場合の実態、効果、懸案等を把握し、世田谷区で取り組む際の課題等を想定した。

商店街モデル事業では、若者ととも「しもきた倶楽部」を結成し、インスタグラムアカウントやLINE グループを開設した。また、活動のPRも兼ねて、シモキタおやこのまちのつどい市への出店を行ったほか、若者が居場所に求めるものを明確にするため、運営に協力してくれている若者へのプレアンケートや「下北沢まちの案内所」でアンケート調査を実施した。若者・地域の声を聴くことで、通信環境整備、進行方法、若者の参加を促すインセンティブ設計、運営体制等の課題が見えてきた。

イベントモデル事業では、区議会議員や子ども・青少年協議会委員との意見交換会を企画したが、参加者が集まらず開催が困難であったことから、若者が集まる場所に出向いていく方法へと転換した。意見交換での若者の様子は、どこか消極的なムードが感じられたが、若者からは意見交換を好意的に感じているという主旨の話も述べられた。大人に真剣に話を聞いてもらう機会を求めている傾向もあり、若者の意見表明のために、こうした機会を増やしていく必要性を感じた。

2. 今期取り組み内容の検討

今期テーマである「若者とともに変わる地域～若者の視点で」の検討にあたっては、前期の取り組み内容や活動から見えてきた視点などを全体で共有したほか、地域における若者の状況等について、以下のとおり議論を行った。

- 若者は自分の意見を表現できず、自分に自信をもてない若者もいるのではないか。
- 上記のような若者の思いを受け止める仲間・大人と出会える場や機会が必要ではないか。
- 若者と地域コミュニティの中で、相互に影響を与え合うことができれば、より良い地域づくりが実現するのではないか。
- 若者自身が主体的に前に進んでいくには、同年代からの応援や承認がエンジンとなり、進むベクトルを定める際には大人の寄り添いが必要なこともあるのではないか。そのような環境を作っていくことが大切ではないか。
- モデル事業を若者と取り組む際は、大人は若者の声を聴き、意向を尊重することが必要ではないか。
- 若者の声を地域の活性化に活かしていくには、大人と若者がパートナーとなることが世田谷のスタンダードとなるべきではないか。
- 継続性や汎用性のある具体的な取り組みを実施していくべきではないか。

まずは、短い期間・小さい形からでも実践できることにトライアルし、活動の中で得られた知見を基に次のステップに進めるべく、モデル事業を実施していくこととした。

<モデル事業に取り組むにあたっての検討>

R元-2年度期 検討

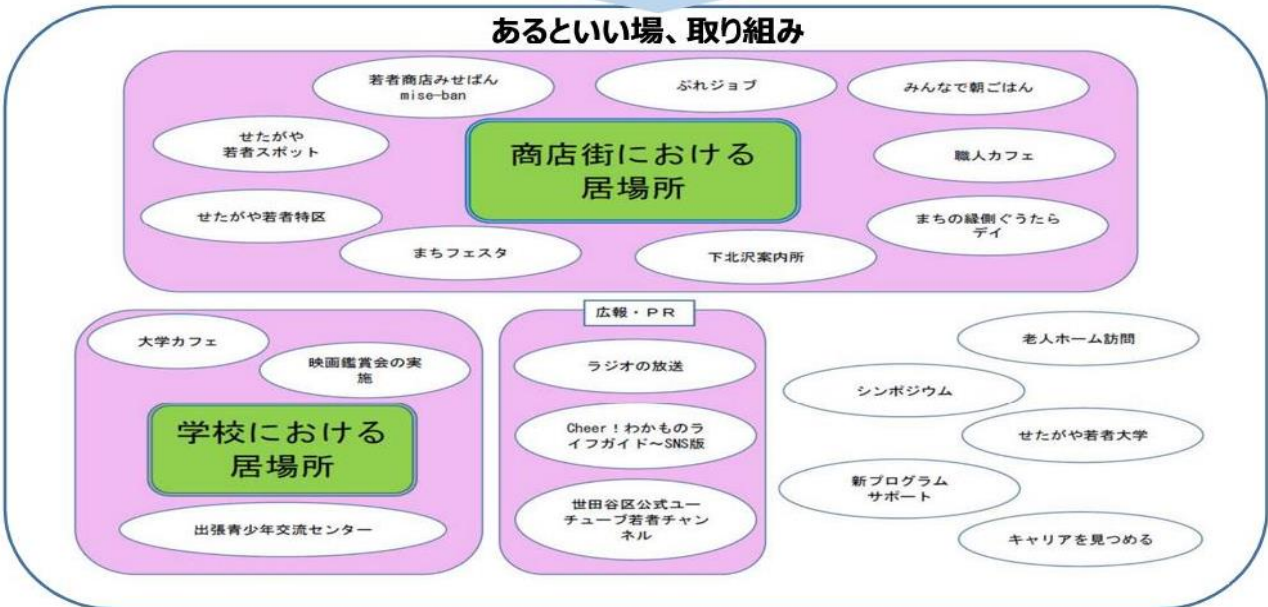
「若者の力が活きる地域」実現のため区が取組むべきこと



R3-4年度期

若者とともに変わる地域

あるといい場、取り組み



モデル事業実施にあたっての視点

- ・すべての若者を対象とする？特定の若者に焦点をあてる？
- ・若者は、その事業の担い手として関わる？受け手として関わる？
- ・若者自身がやりがいを感じ、能動的・自発的に取り組んでいける要素がある？
- ・若者が参加したくなるインセンティブは？
- ・モデル事業終了後も継続していける体制か？
- ・その事業に取り組むことによって、地域が「若者とともに変わる」か。あるいは、地域の変化に若者が関わっていくことを促せるか？
- ・上記のようなアイデア等を実現できるような仕組みづくりが必要。例えば継続的に運営資金をサポートできるような体制やスキーム構築。

モデル事業案1：学校における居場所（学校カフェ）

- ・前期、検討を進めてきたという経緯もあり、引き続き継続すべき事業である。
- ・若者が日常過ごす学校の中に、非日常の居場所をつくることによって、より多くの若者に新たな居場所を届けることができる。
- ・実施場所をどこにするか検討が必要。高校・中学で実施する場合のメリット・デメリットを明確にし、実施場所を決定する必要がある。
- ・学校の図書室やランチルームなどを活用するのが良いと思われる。
- ・また、学校の出入口近くの部屋であれば学校に来ていない子も入りやすい。
- ・映画鑑賞会等を実施し、大人と若者が交流する機会があると良い。
- ・区の放課後活動支援（STEP）の助成金を利用できないか。
- ・学校カフェの運営については、まずは「出張アップス」として、青少年交流センター職員が行い、少しずつ輪を広げていくという方法も考えられる。

モデル事業案2：商店街における居場所

- 案1
- 活動は小規模でも継続してれば、新しいやりたいことが生まれてくる。
 - 駄菓子販売等の小さな商い、リアルなお店の体験ができる場をつくり、継続的に活動する中で若者のやりたいことを実現していく。障害のある方のお手伝いをひきこもりの方にもらうなど、役割を与え、参加しやすい環境を作ることも大切。定期的な職業体験であれば、受け入れてくれる店もある。
- 案2：コミュニケーションカフェ
- やりたいことがある若者が一歩踏み出せるカフェとして、若者がいきたくる知名度のある地域に拠点を持ち、若者が主体となって動ける場所・地域に根差して自走できる形を作っていく。
 - まずは1、2週間短めの期間で行い、成功したら場所を広げていく。

Ⅱ. モデル事業の実施検証

前述したように、前期の取り組みでは、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、思うように活動を進めることができなかったことから、令和2年度までの取り組み内容・視点を引き継ぎながら、学校でのモデル事業・商店街でのモデル事業を実施することが決まった。

モデル事業の実施に際しては、前期の提言である「多様な若者に、多様な居場所を」や「現場に出向き、若者の声を聴こう！」等を踏まえ、若者の声を聴くことを意識し、地域や学校に協力を仰ぎながら取り組むこととした。

1. 学校でのモデル事業

◆校内カフェ（大東学園高等学校）

（1）検討経過

令和元年～2年度期の子ども・青少年協議会より学校内の居場所に関する議論がなされてきたところであるが、新型コロナウイルスの影響を受けモデル事業実現には至らなかった。

今期は、希望丘青少年交流センターで実施している出張アップス（P.19以降参照）を参考に学校内の居場所について検討してきた。若者が地域に対して何か意見表明をするためには、その前段階として、若者と地域の人が出会い、コミュニケーションを図る機会を増やすことが必要だという意見が挙がり、そのためには地域の人、若者がいるところに出向く必要性があるとの結論に至った。

そこで地域の人学校に出向き、日常の学校とは異なる環境で、リラックスしてコミュニケーションを図ることができる校内カフェを試験的に実施するためには何が必要かを検討した。

また、校内カフェ実施校は中学校か高校か、私立校か公立校か、アプローチしやすい学校がどこかなどについても併せて検討した結果、学校運営に関わる事項を生徒・保護者・教職員の三者で話し合う協議会や、さまざまな地域活動にも取り組んでいる大東学園高等学校が候補に挙がった。

大東学園高等学校へは、企画書を作成し説明したうえで、学校の職員会議で検討いただいた結果、了承を得ることができた。

（2）実施概要

①目的

- 学校内に教職員と生徒、先輩と後輩といった縦の関係のない場所を設けることで、生徒が発言しやすい環境を作り、生徒の本音を拾うことを目的とする。
- 学校内に気軽に訪れることができる居場所を用意することで、生徒が抱える悩みなどに寄り添っていく場とする。
- 生徒が、地域の住民や若者支援施設で働く人、区職員など、多様な大人と交流することで、新たな発見や気づきを得ることができる。
- 生徒との会話の中から、生徒の考えや実情を知ること、理解しあえる関係を築く。

②周知

- 各教室において「校内カフェ」のポスターを掲示して事前周知にご協力いただいた。
- 初回の校内カフェを開催する前に、「三者協議会」に出席し、PRを行った。



校内カフェ周知ポスター

・当日、会場入口付近に「校内カフェ」の看板を設置し、居場所を開設していることを周知した。

③運営スタッフ

- ・子ども・青少年協議会委員
- ・青少年交流センター職員・学生インターン
- ・地域の協力者
- ・世田谷区職員（子ども・若者支援課）

スタッフには事前に運営に際しての心構えや注意点を話し合う時間を設けた。

④実施内容

実施日時：平日の放課後2時間程度

- ・昇降口に近い1階の教室をお借りし、リラックスできる空間をつくり、地域の大人やインターンの大学生とのんびりとおしゃべりをする。
- ・学校側に確認し、気軽に参加できるように、お茶・ジュースなどの飲み物やお菓子、マンガ・雑誌、ボードゲーム、ウクレレなどを用意し、交流しながらゆっくりと過ごす。
- ・2回目以降については、初回に参加してくれた生徒の方や運営スタッフからの意見・アイデア等を踏まえ、校内カフェを実施する。
- ・相談事など、ここで聞いたことは他言しないことを書いたボードを準備しプライバシーに配慮した。

⑤学校側にお願いしたこと

- ・校内カフェを実施するための部屋またはスペースの借用
- ・校内カフェ実施の周知
- ・校内カフェ実施に向けての生徒へのアイデア募集

(3) 実施結果

令和4年度は11月～2月に月1回の計4回、場所はいずれも1階の教室をお借りして実施することができた。

<第1回>

日時：令和4年11月29日（火）15時30分～17時30分

参加人数：合計58名（高校生46名、教職員2名、スタッフ6名）

<第2回>

日時：令和4年12月6日（火）15時30分～17時30分

参加人数：合計66名（高校生59名、スタッフ7名）

<第3回>

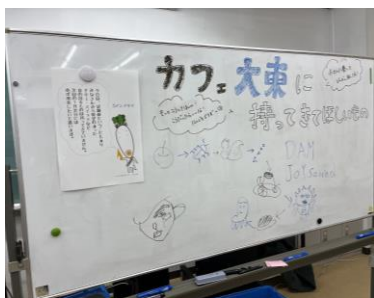
日時：令和5年1月31日（火）15時30分～17時30分

参加人数：合計51名（高校生40名、教職員1名、スタッフ10名）

<第4回>

日時：令和5年2月14日（火）15時30分～17時30分

参加人数：合計49名（高校生42名、教職員1名、スタッフ6名）



(4) 運営スタッフの感想

①希望丘青少年交流センターユースワーカー 小川 咲さん

学校という場所で普段関わることができない若者に会うことができ、とても新鮮だった。一緒に遊び、何気ない話を重ねるなかで、名前を覚えてくれる、輪の中へ誘ってくれる、次回の約束をするなど少しずつ関係性が築かれつつあり、継続した実施によってその関係性がより深くなるだろうと想像する。今後校内カフェが若者たちにとって居心地のよい場所となるよう、学校の中にしっかりと根を張っていくことが必要だと感じた。

②希望丘青少年交流センター地域サポーター 大垣 真理子さん

3回の訪問でまだまだ必要とされている感じは正直に言ってしないですが、きっと必要としている生徒がいるんだと思います。長く続けないとわからないことがたくさんある活動です。公的なことや生活に関わる金銭的な仕組みのことなども（生活保護や税金のことなど）伝えられる場にもなるといいと思います。

(5) 協力者・参加者の声

①大東学園高等学校教頭 佐々木 准先生

かねてより大東学園では本校らしい教育課程を検討する中で「サードプレイス」づくりを模索しておりました。コロナ禍において子どもたちは社会的にも「非接触の所作」を求められることが多くなり、膝詰めで「温もりと承認」を感じる機会が少なくなったと実感したところでもありました。

そんな折に校内カフェのお誘いをいただき、既に4回が経過しましたが、家族でも教員でもない地域の方（職員の方）に「存在そのものを承認された安心」を感じている様子です。あの空間にはそれぞれ経験値の違う老壮青が集っていますが、早くも常連めいた子どもたちがお気に入りの「大人の方」を頼り、何のしがらみもなく（良くも悪くも）等身大の自分を表現し、視点や持ち味の違いを受容し、一緒に楽しむひと時に安堵している姿があります。

本校の教育づくりに助言をいただいている同志社大・西山溪助教も「学校に学校じゃない空間を創出すること自体が子どもの社会参加につながる」と、この取り組みが有意義であるとの認識を示してくださっております。このような機会をいただきまして感謝しております。ありがとうございました。

②参加者の声

次頁「[校内カフェに参加した生徒からのアンケート結果](#)」参照

校内カフェに参加した生徒からのアンケート結果（回答者：7名）

1. カフェに来ようと思った理由はなんですか？（複数回答可）

項目	回答
楽しそうだったから	4
お菓子・飲み物があるから	3
なんとなく	1
珍しかったから	0
面白そうなゲームがあったから	0
その他	友達がいるから、もう常連だから

2. カフェの印象に当てはまるものを選んでください。（複数回答可）

項目	回答	項目	回答
楽しい	5	オープン	0
にぎやか	4	安心感のある	0
自由	3	入りづらい	0
居心地のよい	2	リラックスできない	0
親しみやすい	1	あまり印象がない	0
騒がしい	1	その他	お菓子が豊富

3. 今後もカフェがあったら参加したいと思いますか？

項目	回答
毎回参加したい	4
毎回は難しいけど時々参加したい	3
もう参加しない	0

4. カフェに参加して感じたことや今後実施してほしい企画・要望がありましたら自由に書いてください。

（例：落ち着いて過ごせるから今後も続けてほしい、金曜日に実施してほしい、遊べるゲームを充実させてほしい など）

（
 ・スピーカー最高！
 ・また来てくださーい
 ・たくさん来てください～！
 ・毎週水曜日に来てほしいです！
 ・ギター
 ）

5. 大東学園の近隣にある希望丘青少年交流センター「アップス」を知っていますか？

項目	回答	項目	回答
知らない	4	時々利用している	0
知っているが利用したことはない	3	頻繁に利用している	0

(6) 検証結果

学校内における生徒の居場所、地域の大人と生徒の交流の場の必要性について、学校モデル事業を実施することで検証してきた。大東学園での校内カフェの実施と船橋希望中学校での出張アップスに参加することで分かったことを、以下のとおり紹介する。

①学校内に居場所をつくる効果

- 普段通っている学校内に場を設けることで、時間に余裕がない生徒でも気軽に参加することができた。
- 自分のことを話したい・話を聞いてほしいという気持ちを持っている生徒が少なからずいるように見受けられた。
- 普段、家族や友人、学校の先生といった特定の他者以外と関わる機会が少ない生徒にとって、地域の大人と交流することで新たな学びや刺激を受けたと考えられる。
- これまで体験したことがないゲームや遊び、音楽や流行などに触れることで、新たな文化を知ることができたと思われた。
- 学校の中に少しでも楽しめる、ほっとできる場をつくることは、生徒にとっての一つの居場所となると考えられる。
- 学校の中という安全な場で実施することで、保護者や学校の先生が、一定の安心感を得られると考えられる。
- 学校に行きたいけれども行けない若者が社会とつながりを持つ手だてとして、校内カフェは有意義な場所になると考えられる。
- さらに参加者に実施したアンケート結果からも、来るきっかけは様々だが、校内カフェに対してポジティブな印象を持ち、継続して参加したいという回答が多かったことから、必要とされている居場所だと言える。

②生徒と大人の信頼関係を築くために必要なこと

- 最初は顔見知り程度の生徒と運営スタッフの関係性が、実施回数を重ねていくうちに徐々に信頼関係が育まれたことで、生徒が本音で話すことができる関係性に発展する場面が見受けられた。生徒との信頼関係を築くためには、時間と空間を共有し少しずつ心を開いてもらうことが大切であると考えられる。
- 「やりたかったゲームを持ってきてくれた」、「自分の好みのジュースがある」など、些細なことでも、要望したことが実現した瞬間に生徒との距離感が近づいた。若者の声を聞き逃さないこと、適切にフィードバックを行うことで、徐々に「自分たちの居場所である」という帰属意識が生まれたと考えられる。
- 生徒の悩みも多様で、勉強、部活、友人関係、恋愛など身近なものから、ヤングケアラー、生活困窮、LGBTQ など様々な悩みを抱えていると聞く。運営スタッフは生徒の悩みに寄り添いながら、必要に応じたサポートをできることが求められる。

③地域とのつながりをもたらす可能性

- 学校の中で地域の大人と関わることで、地域を知るきっかけとなり、地域への愛着が生まれると考えられる。
- 若者の地域参加は多世代との交流や人間力の醸成など、若者自身の経験としても意義があると考えられる。
- 地域参加する若者が増加すれば地域の活性化を促進するとともに、地域と若者がつながることで地域の課題解決に寄与することができる。
- 学校内に地域の大人が入ることで、教育の場に福祉的な要素を取り入れることができる。
- 校内カフェは学校内での居場所以外で地域と繋がれるようなきっかけにもなる。

(7) 課題と取り組みに向けた考え方

学校モデル事業を実施していく中で、学校内の居場所を継続的に運営していくためには、いくつかの課題が挙げられる。これらの課題を解決するにあたって必要と考えられる取り組みを以下のとおりまとめた。

課題①地域に根差した運営主体の確保

- 学校との良好な関係を築くためには、地域に根差した団体による運営が望ましい。身近な存在である地域団体は、学校以外で顔を合わせることもあり、日常的な関わりを持つことができる。
- 地域に根差した運営としては、例えば青少年交流センターが考えられる。今回、希望丘青少年交流センターの協力のもとで実施したが、他の青少年交流センターでの実施も検討できる。
- 継続的に運営するためには、予算やスタッフを安定的に確保できることも条件である。
- 世田谷区内の地域団体に公募をかけて、校内カフェを実施したい団体を募るなど持続可能な体制を検討していくと良い。
- 地域団体が運営することで、学校を卒業（場合によっては中退）した後もつながりを持つことができ、福祉的な課題を持つ若者に対して、継続的にサポートすることができる。
例) 児童館、青少年地区委員、PTA、おやじの会、地域のNPO、プレーパークなど

課題② 福祉的な視点を持った運営スタッフの人材育成

- 子ども・青少年協議会委員、青少年交流センター職員、地域の人など多様な人材が校内カフェの運営に携わるにあたり、以下のような基本的なスタンスを守り、人権に配慮して若者と接することができる人材を育成する必要がある。

校内カフェを行うにあたって確認した基本スタンス

- 若者との対話を楽しむ。若者の話を傾聴し、共感する。
 - 少しずつ信頼関係を築く。急に距離を縮めようとしない。
 - 安心できるゆったりとした空間にするために、なるべく否定的な言葉を使わない。
 - 配慮はするが、背景には踏み込まない。
 - 自分の価値観を押し付けない。踏み込んだ助言は行わない。
 - 深刻な相談については、なるべく本人の了解を取った上で、責任者と共有する。緊急を要する場合は、本院の了承がなくても共有する。
 - 個人情報の交換はしない。
- 他自治体で既に学校内の居場所事業を行っている NPO 法人等から講師を招き、講義を聴いたり、グループでケース事例を検討したりするような研修を行う。
 - 校内カフェに関わる全ての大人が、若者の存在や考えを尊重することで、少しずつ意見交換ができる関係を築くことができ、それが福祉的な要素を持ち合わせた居場所につながる。
 - 運営スタッフ同士での顔合わせすることで、情報共有に努め、共通認識を深める。
 - 中には自分の意思をうまく伝えることができない生徒もいる。運営スタッフはそういった生徒の SOS を見逃さないようアドボカシーに配慮した対応も求められる。
 - 生徒の心を解きほぐしながら意見を引き出すことがアウトリーチ型支援の一助となる。
 - 一方、若者のメンタルヘルスを考えた場合、専門家ではない大人に相談する方が効果を得られるという調査結果も出ている。よって、これらの経験のない大人が楽しく関われることも大切である。

課題③ 周知方法の改善・広報の強化

- 学校内で教室や部活動以外の居場所があるということを生徒や保護者、地域の方に知ってもらうために、ポスターだけではなく SNS (Twitter や Instagram、TikTok 等) も活用して、気軽に訪れることができる居場所があると情報発信していくことが大切である。
- 学校に足を運ぶことが難しい生徒へのアプローチも必要であるとの意見が挙がった。本当に居場所を必要としている人に情報が届いていない可能性も考えられるため、多くの生徒が参加できるよう間口を広げた活動を目指すことが望まれる。

課題④ 実施する学校についての検討

- 実施にあたっては、学校長だけでなく教職員からの理解が不可欠である。職員に学校内の居場所を創る意義を理解していただける説明・提案をしていくことが重要である。
- 実施する学校が中学校か高校かでもアプローチが異なるため、各学校のニーズに合わせた構想が必要である。

- 大東学園のような私立高校だけではなく、都立高校も視野に入れていくべきという意見も挙がった。
- 公立の学校の場合、定期的に校長先生の異動が考えられるため、校長先生の意向によって、実施が左右されると継続的な校内カフェ運営はできない。さらに、教育委員会や学校の指導が入らない自由度がある場でない、生徒にとっての魅力が低減するということがある。
- 校内カフェが回数を重ね、生徒と運営スタッフの関係性が築かれていく過程で、生徒から様々な相談をされるケースが生じた場合、単に「居場所」という機能だけではなく、福祉的機能の一端を担うことにつながると想定される。新規で実施する学校にはその点についても校内カフェの強みとしてアピールすることが実施校開拓への一助となると考えられる。

課題⑤ 教育委員会との連携

- 世田谷区立の全中学校に実施を拡大する場合、教育委員会の理解と協力が不可欠である。
- 教育委員会としても、全ての学校との調整が生じるためハードルは高い。
- 学校に生徒の第三の居場所をつくる意義は、福祉的な要素も含めて大きい課題も山積しているため、引き続き検討すべき課題であると考えられる。

◆参考にした居場所事業 —— 船橋希望中学校での「出張アップス」 ——

(1) 検討経過

校内カフェ同様、前期の協議会から学校内の居場所について検討してきた。

令和3年以降、中高生の居場所を実施する学校について検討した結果、希望丘青少年交流センター「アップス」と関わりがある船橋希望中学校より協力いただける旨の話があった。

希望丘青少年交流センター「アップス」の周知も兼ねて、希望丘青少年交流センター職員と地域の協力者（子ども・青少年協議会委員）とともに「出張アップス」を開設することが実現した。

(2) 実施概要

①目的

- 学校内に教職員と生徒、先輩と後輩といった縦の関係のない場所を設けることで、生徒が発言しやすい環境を作り、生徒の本音を拾うことを目的とする。
- 学校内に気軽に訪れることができる居場所を用意することで、生徒が抱える悩みなどに寄り添っていく場とする。
- 学校には足が向かない生徒へ、家でも学校でもない居場所として希望丘青少年交流センターなどの施設があることを知ってもらう。

②周知

- 各教室において「出張アップス」のポスターを掲示して事前周知にご協力いただいた。
- 当日、会場入口付近に「出張アップス」の看板を設置し、居場所を開設していることを周知した。

③運営スタッフ

- 希望丘青少年交流センター職員、希望丘青少年交流センターの学生インターン、子ども・青少年協議会委員が運営にあたった。
- スタッフは事前に運営に際しての注意点等を話し合う時間を設けた。

④実施内容

- 生徒とのコミュニケーションツールとしてボードゲームやウクレレ、雑誌等を持参したほか、学校に許可をいただきお茶・紅茶を準備した。
- プライバシーに配慮し、ここで聞いたことは誰にも話さないことを書いたボードも準備した。



出張アップス周知ポスター

(3) 実施結果

今期は下記のとおり計3回実施した。

<第1回>

日 時：令和4年3月22日（火） 15時30分～17時30分

来場者：8名

運営スタッフの感想

- ・出張アップスに興味を持ちながらも部活に行くという生徒が数名いた。
- ・中学生は大学生など若いスタッフのほうが話しやすそうな印象を受けた。
- ・リラックスする雰囲気づくりを大事にしながらも、消毒グッズや入り口の看板、注意事項を掲げるなど、必要な対策ができたと考える。



会議室内で生徒と交流する様子



入口前の出張アップスの看板

<第2回>

日 時：令和4年5月16日（月） 15時30分～17時30分

来場者：10名程度（入口付近で交流した生徒を含めると30名程度）

運営スタッフの感想

- ・学生インターンの方たちがとても丁寧に生徒たちと話をしていた。
- ・学校の先生への理解や実施場所など、課題も感じた。



会議室内で生徒と交流する様子



出入口付近で生徒と交流する様子

<第3回>

日 時：令和4年11月19日（土）14時00分～16時00分

- 平日だと友人関係などにより学校に足が向かない子どももいると考え、土曜日の開催を試みた。
- 居場所の環境づくりは、ほっとスクール（教育支援センター）からのアドバイスを踏まえた上で、学校と調整した。
- 今回は、学校に足が向かない生徒や大勢の人がいる場所は苦手な生徒に来てもらいたいとの理由により、生徒への周知は、船橋希望中学校の「すぐーる」という保護者向け一斉メールの配信のみに限定した。保護者を通じての情報発信の難しさもあり、残念ながら参加者はいなかった。今後は、該当する生徒に情報が届くよう周知方法を工夫し、継続的に実施しながら判断をしていきたい。

当日、学校のホームページでも、出張アップスの様子を配信していただいたことは、今後につながると感じた。

■■ コラム ■■

持続可能な学校内カフェの運営について

希望丘青少年交流センター「アップス」 下村 一

校内カフェの意義

1. 地域と若者とが出会うきっかけづくり

中学生の時期には、地域との接点は多少なりともあるが、高校生・大学生になると行動範囲が広くなり、自分の住んでいる地域との関係性は薄れる傾向にある。まして学校生活のほか、アルバイト、部活やサークル活動などで忙しく、地域活動の類はほとんどできないのが現状だと思われる。

そうした背景のもと、若者の声をコミュニティに反映していくためには、若者と地域との接点を意図的に多くしていくことが不可欠である。若者がいる場所に地域の大人が出向くことは有効な方法であり、学校に出向くことは最も有効な手段の一つとして考えられる。

2. 対話による意見形成支援

若者が意見表明をできるコミュニティを目指す場合、コミュニティ側が表明した意見を真摯に受け止めることがとても重要である。意見がコミュニティに受け止められ、何らかの変化が生まれることは、若者に限らず誰でも達成感を感じるに違いない。

同時に、若者が意見表明をしていくプロセスを考えた場合、若者が何か感じているモヤモヤを意見として形作っていくためには、意見形成支援という前段階が大切だと考える。感じていることの輪郭が不明確で、人に伝えるまでに至っていないモヤモヤを、意見という形にしていくための支援で、そこには多様な価値観を持つ人との対話が有効だと考えられる。継続的に校内カフェを実施していくことで、カフェのスタッフとの対話が意見を形成するきっかけになるとも考えられる。

3. 学校の中によりほっとできる空間を創る

学校内でのカフェのような居場所づくりは、学校生活にも良い影響を与える可能性がある。学校は教育を通じて若者の成長を促す場であり、そこには教師と生徒という関係性が必要である。一方で、教師との関係性には、構造的に緊張関係が生まれやすいという側面もある。この側面が大きくなり過ぎると生徒には負担となり、こうした負担を軽減する上でも、利害関係のない地域の大人が居るということが重要な意味を持ってくる。不登校の生徒が増えている現状を考えると、学校の中にほっとできる異空間を創ることは意義があると考えられる。

持続可能なものにするための仕組みづくり

1. 学校との信頼関係の構築

学校の中に、学校とは価値観の異なるカフェをつくるためには、何よりも学校との信頼関係を確立することが大切である。今回のモデル事業においても、学校長との懇談、職員会議へのご挨拶、実施後のふりかえりをしながら、少しずつ事業への理解を深めていくよう努めた。しかし、一人ひとりの教職員の方たちに、その必要性をご理解いただくまでには至らなかったように感じる。実際に、価値観や規則などの相違から、さまざまな課題が発生した。この課題について、意見交換しながら、相互理解を深めていくという丁寧な作業が必要だと感じた。

2. 拠点施設との連携

校内カフェは地域の大人と生徒や教師との関係性が重要な鍵であり、こうした信頼関係を築くためには定期的な開催が必要である。そのためにはさまざまな物品を保管・準備したり、学校との連絡をとったりと地域と学校をつなぐコーディネーター的な存在が必要である。今回は青少年交流センターがその役割の一端を担ったが、継続的な開催をする場合、児童館や青少年交流センターなどを拠点として実施することが望ましいと考える。校内カフェで生徒との関係性ができた場合、地域の居場所へとつなぐことも可能となり、より重層的に見守ることができるようになる。

3. 対話のための人材育成

校内カフェの最も大切な要素は、多様な価値観を持った地域の大人の存在である。ただし、若者の発達段階や居場所の意味を理解し、若者の声に耳を傾けることができるということが条件になってくると考えられる。やみくもに自分の価値観を押し付けるような大人であれば、若者は反発するだけになってしまう。若者との対話ができる地域の人材を育てるという視点も大切になってくる。

■■ コラム ■■

学校カフェ

世田谷区青少年委員会元会長 森岡 美佳

「ねー、これ見て」とおもむろにスマホを取り出す高校生。画面には『推しアイドル』『お気に入りのアニメのワンシーン』『ミュージックビデオ』…、話題はそこからどんどん広がる。どこに惹かれているのか、惹かれている自分も含めて話したくてうずうずしているし、聞いてもらいたいようであった。そして聞いている私は知らない世界を垣間見ることができワクワクしてしまう。学校カフェへは一人で参加、友達と共に参加、通りすがりに覗いてみた、お菓子や飲み物にお得感を感じてなど参加の仕方動機も色々である。オープンしたばかりの嵐のような時間が過ぎるとカフェも本来のゆったりとした時間を取り戻し、文頭のような会話がポツリポツリと始まるのである。生徒さんたちはその場にいる私（大人）にも隔てなく話しかけてくれる。少しばかり肩に力が入っていた私の体も自然体へと変わっていく。そんな時間を共有した学校カフェであった。

私たちは前期から多様な価値観の大人と出会いフラットに話せる場、自分の考えが具現化することを体験できる場、ホッとできる場である学校カフェの必要性を唱えてきた。そのためモデル事業として今期実施出来たことをとても嬉しく思う。実際にお茶を飲みながら生徒さん（若者）と地域の大人との交流のきっかけになり、回数を重ねるごとに様々な生徒さん（若者）の考えを知り得る可能性を感じた。また、今回はホワイトボードに次回開催時の要望を記入してもらった。今のところお菓子の種類やゲームのリクエストのみだが、生徒さん（若者）にとって要望したことが受け入れられる機会となればと考えている。ともすれば「言っても無駄」という生徒さん（若者）が少なからずいると思う。「そんな世の中ばかりじゃないよ」と伝えられる場になれば良いと思う。機会を重ねるうちにホワイトボードがリクエストで一杯になり、その場にいるみんなで喧々諤々話し合うというのが私の夢である。

最後にモデル実施した学校カフェの取り組みが区の施策として区内全域に広がっていくことを期待し、また事業が持続可能になるよう今後も考えていきたいと思う。

■■ コラム ■■

今期の取組を振り返って

メルクマールせたがや 廣岡 武明

私は前期に引き続き、今期も学校でのモデル事業に携わらせていただきました。コロナ禍であることは変わりありませんが、前期のコロナ真っ只中の時期と比べて行動制限が緩和され、2年越しに校内カフェをモデル実施できたことが、何よりも嬉しかったです。

私は12月に船橋にある私立大東学園高校の校内カフェに初めて参加しました。普段入ることのない校内に緊張しながらも、いざカフェがオープンすると、お菓子や飲み物目当ての高校生たちがどんどん入ってきて、その勢いに圧倒されました。大東学園の高校生たちは、人懐こい子が多いのか、高校生からたくさん声をかけてくれるし、私からの声掛けにも応じてくれて、初参加の緊張はいつの間にかなくなっていました。後半になると、はじめの勢いとは打って変わって、ゆったりと雑談やアナログゲームを楽しむ居場所になっていました。

印象的だったのは、大東学園での校内カフェは11月から始まったのですが、2回目にして連続性を持って利用している高校生がいたことです。前回希望したアナログゲームを準備していたことを喜んでいて、その姿を見て、自分が言ったことを覚えていてくれたり、実現されることが若者とのコミュニケーションでは大事なのだと実感しました。

初参加の校内カフェの感想は、食べ物やゲーム、雑誌などがあることで色々な高校生との接点を持てることがわかったのと、時間帯によってカフェの雰囲気の変化するのが印象に残りました。また、高校生の若者に校内カフェのニーズはあると感じましたし、若者と地域の大人との交流のきっかけ作りの場として、大変有効と感じました。校内カフェの取組みが区の施策となって区内で広がることを目指し、継続性のある形で実現できるよう青少協の委員として考えていきたいです。

■■ コラム ■■

「挑戦（チャレンジ）」

若者と咲かせるネットワーク・せたがや 近藤 三知香

今期テーマ「若者ととともに変わる地域～若者の視点で」を検討するところから、私の青少協委員の活動がスタートしました。前期委員の皆さんの振り返りのお話は私の学びの場になりました。続いて「学校でのモデル事業」についての討議と実践が始まりました。その中で感じたことと気が付いたことなどを次に述べます。

○管理された教育の場の中にカフェという癒しの場を設けることは「挑戦（チャレンジ）」だと思います。しかし私が長年世田谷区の小中学校に文化庁芸術家派遣事業でアーティストを紹介し教育ではないアートの時間をサポートしてきたことも「挑戦（チャレンジ）」でした。異質なもの同士の出会いは、思いがけない不思議な力を生み出します。校内カフェにもその可能性を切り拓く意味があると思っています。

○船橋希望中学校と大東学園高校でのモデル事業の取り組みで学んだことは、私たち支援者の大切な精神はまさに「子どもの人権保障」だということです。専門の委員の方たちとご一緒に取り組んだことでこのことを実際に学ばせていただきました。

○大東学園高校の先生方とお会いした時に、先生方は「生徒にとって校内カフェのような場が必要だと思って何年も前から検討を進めてきた」とおっしゃいました。「子どもの最善の利益」を追求し続けておられる先生方に出会うことができうれしかったです。

○校内カフェでの生徒とのリアルな出会いは、自分の生き方を見つめ直す機会にもなりました。

○モデル事業実施の地域の住民として、この事業を継続発展させるために、今後も全力を尽くしたいと思っています。

2. 商店街でのモデル事業

(1) 検討経過・実施結果

令和元年～2年度期の子ども・青少年協議会より、商店街に若者の「第三の居場所」を展開することについて議論がなされてきた。商店街での実施理由として、学校・職場の行き帰りや日常の買い物で立ち寄る身近な場所であることや、商店街の多様な人々との出会いや交流が生まれること等が挙げられた。

取り組みとして、活動の周知や仲間づくりのため、地域のイベントへブースを出店するなど、新型コロナウイルスの影響がある中でできることを行ったが、若者自らが運営する場づくりの実現には至っていなかった。

令和3～4年度期では、前期立ち上げた活動グループ「しもきた倶楽部」を母体として、引き続き下北沢を拠点としてモデル事業を進めることとなった。活動を進めるためのステップとして、まず地域や、地域で働く人々について知ること（STEP1）。次に、若者自らが地域のイベントに参加し、地域を訪れる人のリアルな声を拾うこと（STEP2）。最後に、地域の中での場づくりに取り組み、若者自らが企画・運営するイベントの開催が実現した（STEP3）。



STEP 1：地域を知る～「まち歩き」の実施（令和4年3月）

■令和4年1月26日 第4回小委員会

- ・商店街チームにおけるモデル事業の検討において、「まち歩き」の実施を決定。
- ・若者から見た地域の魅力・課題を知ること、若者との関係性をつくるきっかけづくりを目的に設定。
- ・活動場所は、前期に引き続き「しもきた商店街振興組合」の方々に説明及び協力依頼をおこない、下北沢商店街にて実施することとなった。

■令和4年2月～ 「まち歩き」の参加者募集

3月の「まち歩き」実施に向け、以下の広報をおこなった。

- ・若者委員によるちらし作成
- ・区HP、ねつせた！、大学、青少年交流センターでの周知
- ・日本大学文理学部の久保田先生に協力を依頼
- ・「しもきた倶楽部」への呼びかけ

【若者限定】魅力発見まちあるき
～若者の視点であるく下北沢～

18～25歳の若者募集！

<新たな発見!？>
いろんな人とおしゃべりしながら
下北沢をお散歩★
いつもは見られないシモキタの裏側が見られるかも!?

<新プロジェクト始動!>
若者主体で地域を一緒に作っていききたい！
そんな思いからこのプロジェクトが始まりました。
その一歩目として若者と大人で、
下北沢の街を歩きましょう。
18歳から25歳の若者ならどなたでもOK！
若くて下北沢の魅力を発見しませんか？
ぜひあなたの力を貸してください！

<概要>
日時：2022年9月21日（月・祝）13：00～16：00
集合場所：下北沢まちの案内所（世田谷区北沢2-24-3）
定員：20名（申込者多数の場合抽選）
費用：無料
交通費相当支給

<当日タイムスケジュール>
13：00 集合
13：30 グループに分かれてまち歩き
15：00 振り返りタイム

<問い合わせ先>
世田谷区子ども・青少年協議会事務局
子ども・若者部 若者支援担当課
TEL: 03-5432-2585
FAX: 03-5432-3050

若者委員作ちらし

■令和4年3月21日 「まち歩き」の実施

- ・若者6名、地域の大人3名、青少協委員8名（うち若者委員2名）が参加。
- ・下北沢駅前まちの案内所にて顔合わせ後、3グループに分かれてまち歩きを実施。まち歩きの中で発見した「まちの魅力」、「まちの課題」を発表しあい、若者と大人の視点の違いなど、多くの気づきがあった。
- ・まちの中で今後取り組んでみたいことについても話し合い、衣類を活用した取り組み、居場所づくり、マッチングによるコミュニティづくり等のアイデアが若者から挙がった。



まち歩きの様子

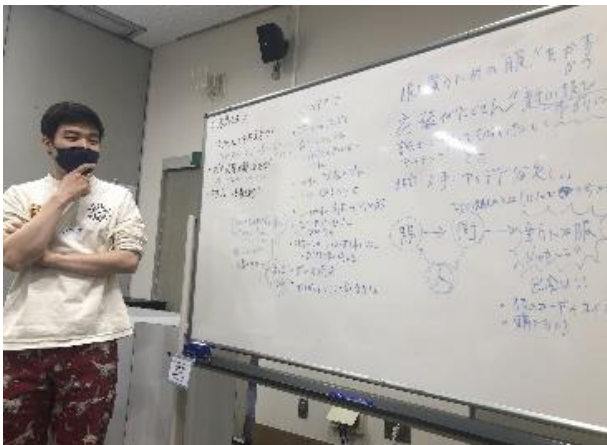


若者の「やりたい」を語り合う！

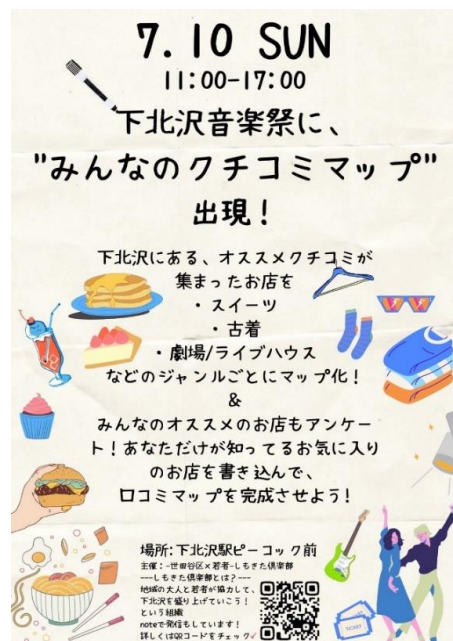
STEP2：地域に出向き、声を拾う～「みんなのクチコミマップ」の実施（令和4年7月）

■令和4年4月～ 若者との企画会議

- まち歩きに参加した若者を中心に、前期に引き続き「しもきた倶楽部」として活動することとし、今後取り組んでみたいことの実現に向けて企画会議を重ねた（対面5回、オンライン1回）。
- 活動の機会を模索していたところ、7月におこなわれる下北沢音楽祭の会場の一角を借りられることになった。まちの若者と接点をもつ機会として、クチコミマップコーナーを設置することに決定。
- 下北沢のおすすめの飲食店・古着屋・劇場・ライブハウス等のクチコミを集め、それをきっかけにまちの人々と交流し、今後の活動のヒントを得ることを目的に設定。
- 当日に向けて、若者が中心となりポスターや当日の対応マニュアルを作成し、音楽祭HPやねつせた！SNS等での周知をおこなった。

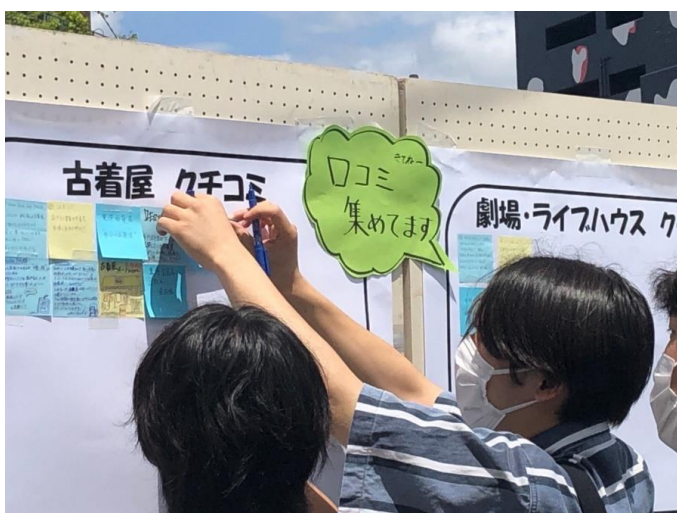


若者を中心とした会議の様子



若者が作成したポスター

- 令和4年7月10日 下北沢音楽祭にて「みんなのクチコミマップ」コーナーを設置
- ・午前11時～午後5時、下北沢駅前スクエアスペースの一角にて開設。
- ・午前チーム、午後チームに分かれ、若者5名、青少協委員7名（うち若者委員2名）が参加。
- ・はじめは声かけに苦戦する姿もみられたが、合計30組以上の方がテントに立ち寄り、クチコミの閲覧や記入をしてくれた。対応の詳細については別紙「みんなのクチコミマップ」記録票参照。
- ・クチコミマップをきっかけに、訪れる人々と接点を持ち、交流するという体験ができた。



「みんなのクチコミマップ」コーナー当日の様子

- ・当日の様子、参加した若者の声を動画にまとめ、YouTubeに公開している。



■令和4年7月27日 「みんなのクチコミマップ」振り返りの実施

- 対面、オンライン2回に分かれ、若者6名、青少協委員6名（うち若者委員2名）が参加。
- みんなのクチコミマップに取り組んだ感想として、「若者が中心となって、大人とも連携をとりながら運営できた実感があった」、「初めて出会う人と交流するという体験が楽しかった」「イベント当日を迎えるまでのプロセス自体に意味があった」などの意見が挙がった。
- 今後の取り組みとして、定期的・長期的な多世代交流の場づくりに取り組みたいとの意見があった。
- 活動を広げていく上で、団体としてのミッション・誰をターゲットとしていくかを考えながら取り組んでいくことを確認した。

【別紙】みんなのクチコミマップ記録票

みんなのクチコミマップ記録票 集計結果

記録件数:30件

- 年代 10代以下 10件、20代 12件、30代 5件、40代 2件、50代以上 1件
- クチコミの協力 あり25件、なし5件
- 交流の有無 あり27件、なし3件

	年代	クチコミの協力	交流の有無	メモ
1	10代以下	○	×	おそらく10代のおふたり。古着屋と飲食店のクチコミを書いていただきました。古着好きな若い2人組、結構クチコミ書いてくれるかも!?
2	10代以下	×	×	
3	20代	○	○	元ボクサー! 10年前くらいに下北に住んでいて2年ぶりに来たらしい。友達とじろうラーメンを食べに来た。
4	20代	○	○	ミカン下北のタイ料理を食べに来た女性2人組。下北にはよく来る。「若者の場」はあったらおもしろそうだけど抵抗ある。でも、渋谷より、下北のほうがあったらいいと思う。下北なら似ている雰囲気の人が多いから行きやすい。
5	10代以下	×	○	静岡から来た高校生らしくて、下北をたのしんでました。
6	30代	○	○	成城学園前から、下北には久々に来たとのこと! ミカンのピザ屋さんをたのしんだらしいです!
7	10代以下	○	○	古着好きな男性2人組。サークルやバイト以外にこういう場所で好みに集まれるようなところがあつたら友達ほしいと思うか聞いてみたところ、古着や車が好きなので同じ趣味の話ができる友達はほしいとのことでした! 下北には、3限終わり〜バイトまでの隙間時間に寄ることが多いそう。
8	10代以下	○	○	下北へよく来られる若い男性。黒川食堂のほかに、マイナーなカレー屋さんを紹介していただきました。
9	30代	○	○	隣の青空個展のブースの手伝いをされてたそう。下北沢にはあまり来ないと言っていたが地下アイドルが好きでオススメのライブハウスを教えていただきました! この後、下北のスクラップがやってる謎解きをやるそうです。
10	50代以上	×	×	柏理事長より、ここで集めたクチコミは今後何かに活かすとよいと思うとのことご意見アリ
11	20代	○	○	オススメの食堂を紹介してくださりました。岡田さんの共通のお友達でした。しもきた倶楽部に参加したいと言っていました。若者の交流の場に賛成!! (岡田係長の前職場のイベント等によく参加されていた大学生。)
12	30代	○	○	子連れ、男性外国人。カキゴオリやさんを教えてくれました。アイコンタクトとゆっくりすすまれてたので声かけやすかった。
13	40代	○	○	ライブハウスを書いてもらいました。色々バーとか言ったことない所多いけど、決まった所しかいかないので、冒険はあまりしないらしい。
14	20代	×	○	クチコミを目的に見に来ていた。
15	10代以下	○	○	若い男性の2人組。下北沢によく来る方と、そうでない方で、おすすめのスケートボードのお店を教えてくださいました。
16	10代以下	○	○	中国人の若い2人組。音楽祭を観に来ていました。クチコミは中国語で書いてくださっておそらく音楽祭の感想を書いていただきました。
17	20代	○	○	ライブハウスの照明をやっている20代男性。しつこくない程度に質問を投げかけていくと、相手のことを詳しく知れました。(北海道から状況して、今まで3,4回下北に来たことがある)
18	30代	○	○	この後ステージで歌う方&彼女でした! 男性の方は音楽性に結構出たらしい。女性の方は10年ぶりに下北に来たらしい。
19	10代以下	○	○	かいと、こうき共通の友達。下北沢によく来られていて、若者の居場所作りポジティブな意見をもらえました。
20	10代以下	○	○	女子高生2人組でした! 新しいお店のクチコミゲットできました!
21	20代	○	○	学生時代の友人同士で初めて下北に来た社会人2人組。器屋さんがやっているかき氷を食べに来た。割とたくさん話をしてくれました。初めての人と会う場は興味はあるけどハードルが高いとのこと。
22	20代	○	○	2人組の女性にクチコミ書いていただきました! 謎解きに参加されていたそうです! 文京区のユースセンターb-labでインターンをしていて、池青の方と交流があるといっていました。Cheer!を持って帰られました。
23	20代	○	○	3人組。お店の名前はわかりませんがクチコミを書いてくださいました。
24	20代	○	○	下北沢によく来るという方と、遠方から来たお友達2人組でした! 帰り際に「がんばってください!」と言ってくれた。これからも応援してもらえようちらしを渡せたらよかったかも!
25	40代	○	○	音楽祭にいらつしゃった男性。ライブをするBARを教えてくださいました。アコギの推し! がいらしやるそう。
26	20代	○	○	下北はあまり詳しくないそうですが、今日行ったカフェのクチコミを書いてくださいました!
27	20代	○	○	2人組。学生時代、よく下北に来ていて久々に来た。Dogberryというカフェとシェルターというライブハウスが推し! だと教えてくれました。
28	20代	○	○	下北沢には古着を見によく来るそうです。古着を見るのは好きだけど、実際に着るとなると勇気がいると話してくれて、共感しました!
29	10代以下	○	○	受験生3人組でした。2人はお昼に食べたラーメン、もう1人は古着屋をクチコミしてくれました。受験生の息抜きって感じてました!
30	30代	×	○	県外から初めて下北沢に来てくれた方でした。おすすめのカフェを知りたくて、立ち寄ってくれました。マップを活用できるともっと説明しやすいかも。

STEP3：地域の中の場づくり～「Hub culture」の実施（令和4年12月）

■令和4年8月21日 若者との企画会議

- ・今後の取り組みについて、若者が作成した企画書をもとに意見交換を行った。
- ・主に、多世代のお客さんがふらっと訪れ、大人と若者がフラットに対話し、自由な交流や繋がりが生まれる場、「(仮称)多世代交流 Bar」をつくりたいという意見があがった。
- ・若者が普段出会えない大人の話を知りたいように、若者の話を聞きたい大人もたくさんいるのでは、という仮説のもと検討を進めた。

■令和4年9月8日 会場候補地見学、若者との企画会議

- ・第1回のテーマは、下北沢を象徴する文化のひとつである「ファッション」に決定。
- ・集客や交流のきっかけとして、下北沢で活躍している人をゲストに呼ぶ、サイコロトーク等のゲームを介してトークテーマを設ける、などの案が挙がった。



若者を中心とした企画会議の様子

■令和4年9月26日 若者との企画会議

- ・交流を深める仕掛けとして、参加者同士で手軽に行えるワークショップ（服の交換、服のコーディネート、服にメッセージを縫い付けるなど）についてアイデア出しを行った。

■令和4年10月17日 若者との企画会議

- ・イベント名の考察、企画案の詳細について意見交換を行った。
- ・会議後、若者による投票の結果、イベント名は「Hub Culture」（ハブ・カルチャー）に決定。世代や文化などを超えて多様な人が集まり、つながる場をイメージしている。

■令和4年11月2日 ボーナストラック内見、若者との企画会議

- ・会場は、6か所の候補のうち、アクセスがよく、空間のデザインが魅力的なことで若者に人気のスポットであるボーナストラックに決定。

- ・日程・会場変更により、予定していたゲストが来られなくなり、テーマを「ファッション」から「下北沢で働く人」に変更し、企画を再構築することとなった。



議論が弾む和室での会議

■令和4年11月中旬～ イベントポスター完成、広報開始

- ・青少年交流センター等へのポスター掲示、ねつせた！SNSでの周知を開始。



若者が作成したポスター



ねつせた！SNSでの周知

■令和4年11月16日 しもきた商店街振興組合等へのご説明及び協力依頼

- ・イベントのゲストとして、ご協力いただける地域の方をご紹介いただくこととなった。

■令和4年12月2日 若者との企画会議

- ・当日のタイムスケジュール、物品、役割分担などの最終確認を行った。

■令和4年12月9日 「Hub culture#シモキタ解剖」の実施

<イベント概要>

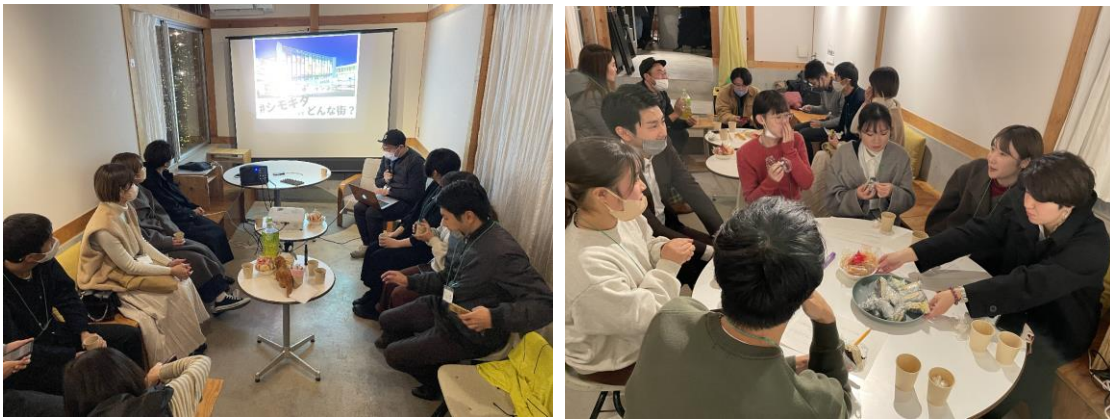
- 日 時：12/9（金）19:00～21:00
- 場 所：ポーナストラック
- 目 的：『好き』や『得意』を仕事にして生きている人とフラットな関係で話すことで、未来にワクワクしてもらいたい&生き方の選択肢を広げる種をまきたい。普段出会わない、関わらないような人と交流する機会を作り、新たなつながりを得られる場にした。
- ターゲット：下北沢の街に興味のある若者
自分の得意や好きを仕事にすることに興味のある若者
下北沢で働いている人に興味がある若者
- ゲスト：株式会社アイラブ 代表取締役社長 西山 友則 様
お粥とお酒 ANDON シモキタ 店長 武田 昌大 様
- 内 容：①参加者自己紹介&アイスブレイク
②ゲスト自己紹介&ゲストトーク
③ワークショップ「下北沢でお店を出すならどんなお店をやりたい？」
④人生ゲームトーク
⑤余韻に浸るキャンドルトーク

• 運営側は若者3名、青少協委員9名（うち若者委員3名）が参加。午後6時に集合し、若者は進行確認やレイアウト・設備・物品の準備等を行い、青少協委員（大人）は調理を担当した。



イベント準備の様子

- 参加者は大学生世代・社会人の若者7名。SNS や区内施設に掲示したポスターを見て参加。
- 最初に、参加者・ゲスト・運営側の若者が混ざってアイスブレイクを実施。
- ゲストトークでは、ご自身の仕事の説明や、会社・店舗を立ち上げた経緯などについて話していただいた。イベント後の参加者アンケートでも満足度が高かったことから、参加者にとって、普段聞くことのできないゲストの話から得るものがあったと思われる。
- ワークショップでは、「下北沢でお店を出すならどんなお店をやりたい？」をテーマに、飲食店チームとイベントチームの2つに分かれてグループワークを行った。ワークショップ中、おにぎりやスープなどの軽食を提供したことで、参加者の心がほぐれ、和気あいあいとした雰囲気生まれ、活発な意見交換がされていた。



ゲストトーク・グループワークの様子

- 次に、若者が自作した人生ゲームトークを実施。すぐろくのマスに、自分の過去・現在・未来についての簡単なトークテーマが書かれており、順番にみんなで話していくというもの。このコンテンツの満足度が最も高く、参加者全員がよかったと回答。自分について話すこと・聞いてもらえることや、その人の人となりが分かったり、個性に触れることができる時間は、若者にとって有意義な時間となることが推察された。



人生ゲームトークの様子

- 最後は、イベントの余韻に浸る時間として、キャンドルの明かりをともしながら緩くお話しする時間を設定。それまでとは違った雰囲気、ゆったりと交流を楽しんでいた。



キャンドルトークの様子

- 参加した若者からは、「新たな発見・出会いもありつつ、とてもコージーな雰囲気ですごく良かった」、「とても楽しかったので、またこういうイベント開催して下さい」といった感想があがった。
詳細は別紙「参加者アンケート」参照。
- Hub culture#シモキタ解剖の開催に向けて取り組んできた若者からは、「フラットな形で交流でき、地域を身近に感じる事ができた」、「うまくいか不安だったが、多くの方が集まってくれました。参加者は誰かの知り合いというのではなくて、SNSを見たりポスターを見たりして参加してくれた方だったので、とても嬉しく、今後も継続してやっていけるのではないかという自信となった」など、イベントの成功を喜ぶ声や、「準備や当日の進行の共有ができていなかったため、前もって他の人にもお願いできるとよかった」など、今後の取り組みに向けての改善点に関する意見・感想が挙がった。

【別紙】参加者アンケート

<参加者の属性>

社会人（30代）	2	20%
社会人（20代）	4	40%
大学生世代	3	30%
不明	1	10%
合計	10	100%

下北沢在住	2	20%
世田谷区在住	3	30%
世田谷区外在住	1	10%
不明	4	40%

下北沢は好きな街としてよく利用している	2	20%
下北沢にはこれまであまり来ることがなかったが興味がある	2	20%
不明	6	60%

Q1. Hub Cultureに参加した理由は？

SNSを見て	3	30%
友達・知り合いに誘われた	4	40%
ポスターを見て	1	10%
スタッフに声をかけられた	1	10%
その他	1	10%

Q2. 今回のイベントへ参加してみてどのように感じましたか。

とても良かった	8	80%
良かった	2	20%
ふつう	0	0%
あまり良くなかった	0	0%
良くなかった	0	0%

Q3. どのコンテンツが良かったと思いますか？（複数回答可）

ゲストトーク（武田様、西山様）	7	70%
グループディスカッション（下北沢でお店を出すならどんな店？）	6	60%
人生ゲーム（すごろくトーク）	10	100%
その他	0	0%

Q4. イベント時間についてどう思われますか？

長い	0	0%
ちょうど良い	8	80%
短い	2	20%

Q5. 普段出会わない人と交流したり、地域の方とつながることはできましたか？

できた	9	90%
まあできた	1	10%
あまりできなかった	0	0%
できなかった	0	0%

Q6. いろんな働き方、生き方を聞いてどう思いましたか？

自分もやりたいことに挑戦してみたいと思った	9	90%
自分には難しいと感じた	0	0%
どちらでもない	1	10%

Q7. 下北沢を身近に感じましたか？

感じた	7	70%
まあ感じた	3	30%
あまり感じなかった	0	0%
感じなかった	0	0%

Q8. 興味のあるテーマを教えてください。（複数回答可）

音楽	7	70%
演劇	3	30%
ファッション	6	60%
グルメ	6	60%
スポーツ	2	20%
地域の歴史	2	20%
その他（芸術・文化）	1	10%

Q9. 感想、自由意見

- ・貴重な機会をいただきありがとうございました。
- ・10代、20代と話す機会がほとんどなかったので貴重な機会をありがとうございました！
- ・グループディスカッションで出た案を実現させたいと思った。
- ・人生ゲームではもっと長くいろんな人からいろんな話を伺いたかった
- ・新たな発見・出会いもありつつ、とてもコージーな雰囲気でした。リラックスできて良かったです。
- ・今日出会った人々と、一回きりではないつながりがあるといいと思った。
- ・とても楽しかったです！ふだんリモートワークで、次回20代・30代の方のイベントなどがあると参加したいです！それ以外でも参加したいです！
- ・とても楽しかったです。またこういうイベント開催して下さい。

■令和4年12月27日 「Hub culture#シモキタ解剖」振り返りの実施

- 若者2名、青少協委員6名（うち若者委員2名）が参加。
 - 「若者の力で場を回っていて、大人も楽しめた」、「リアルで会うことで新しい出会いが生まれていくことを実感した」「ミニマム・オープン・出入り自由な場の価値を感じた」などの意見が挙がった。
 - 今後の取り組みとして、「Hub Culture#1」を3月頃に実施したいとの意見が挙がった。
 - 活動を広げていく上で、より多様な若者に関わってもらうための体制づくりや、しもきた倶楽部が地域の中の場づくりを行う意義について議論した。
- この間、しもきた倶楽部として取り組んできた内容は note にて公表している。



(2) 協力者の声

① しもきた倶楽部メンバー（大学生） 佐藤 幸輝さん

しもきた倶楽部の価値は、どんな取り組みでも現実にする力を持っていることだと思う。それは若者も大人も毎回ミーティングに参加し継続的に議論をするほどの熱量に下支えされている。また、区の職員さんの月例ミーティングの手配やイベント実行の際の手配と準備が行き届いている。ここまで環境が整っている団体だからこそ、自分たち若者は今年度2回のイベントの実績を残せた。しもきた倶楽部の参加者の皆さんには本当に感謝している。

自分は、個人的な活動目標として、しもきた倶楽部を最終的に世田谷の若者と地域活動とをつなぐハブにしたい。しもきた倶楽部を入り口に若者を地域活動にどんどん参画させていく。多くの若者は心の中には様々なやりたいことを持っているものの、それは時間や金銭、責任のハードルの高さに諦めてしまっていることが多い現状にある。つまり、小さな芽が芽のまま終わってしまっているのだ。しかし、実際には地域には、それらのハードルを取っ払い活動をサポートできる環境がある。若者は地域の力強さを知らない。しもきた倶楽部の役割は、若者に地域の力を借りれば自分のやりたいことを形にできるんだよという気づきを与えることだと考える。

また、来年度以降の取り組みでは、より具体的な分野にテーマを絞ったイベントを打ち出し若者が行う地域活動のイメージを掴みやすくしていきたい。より若者の参加者を増やしていくために広告にも力を入れていきたい。これまでの活動から、SNS等の宣伝に比べチラシや手渡しでの宣伝の方が集客率を高めるということが分かった。それらの学びを活かしたチラシの作成や宣伝の仕方をより洗練させていきたい。

② しもきた倶楽部メンバー（大学生） 松井 大葉さん

「Hub culture」はすごく楽しいイベントだった。特に双六は話題に困らないし、普段話していてあまり話題にならない話題だからこそ楽しかった。会場もオシャレでとてもよかった。来ていた人に面白い人が多かった。おにぎりがすごく美味しかった。ゲストの話や、そのあとのゲストと一緒にやってみたい店やイベントを考える部分で下北沢のことをよく知れて、観光したくなった。冬休みにゆっくりまわってみる予定。もう少しゆっくり話す時間が多く欲しかった。

③ 地域の協力者 岩男 海史さん

俳優/服飾家の岩男海史と申します。

しもきた倶楽部には「アドバイスお兄さん(おじさん)」的なポジションで関わらせていただいています。

仕事場において、未だ”若手”とされる事が多い未熟な僕ですが、しもきた倶楽部のメンバーたちはそんな僕をキラキラした眼差しで頼ってくれます。

以前、ある1人のメンバーが「下北沢は”若者の街”と言われているけれど、大人が作った”若者を呼ぶ街”であって”若者が作った街”ではない。僕が作りたいのは、そういう場所なんです。」と濁りなく発言しているのを聞いて驚きました。聡明で野心的な若者との出会いは、僕にとっても大きな財産です。

今は100店舗以上が参加するカレーフェスも初回は4店舗だったと聞きます。

気長けれども着実に。みんなの挑戦が地層のように積み重なっていく場であれば素敵だなと思います。

(3) 検証結果

令和元年～2年度期の子ども・青少年協議会より、商店街に若者の「第三の居場所」を展開することについて検討してきた。今期の取り組みを通じて、若者とともに、若者視点で、まちの中の居場所づくりを行うことの意義や効果について、以下のことが分かった。

① まちの中に居場所をつくる効果

- 今期の商店街モデル事業では、商店街振興組合理事長、地域で活動されている方、商店街で働く方、地域イベントの運営業者等、下北沢にゆかりのある多くの地域の方にご協力いただき、地域の力の重要性を感じた。
実際に、商店街で働く方からお話を聞くことや、地域の施設見学、地域イベントへのブース出店、取り組みへの助言、イベントPR等さまざまなご協力をいただいた。商店街の連携・協力により、若者の活動に広がりが出るとともに、若者が地域の魅力的な大人と出会う機会が創出された。
- 福祉的なケアが必要な若者への施策、困ってから相談に行く窓口だけでなく、地域活動に意欲的な若者やまち中の若者が、日常的に訪れることのできる地域の場づくりも必要である。
- 学校以外で、同世代の若者や地域の大人と関わる機会が少ない若者にとって、まちの中の場づくりは新たな交流の機会となる。
- コロナ禍によってオンライン授業や在宅ワークが広がり、学校や職場などによる対人関係に希薄さを感じている若者にとって、リアルな場での交流は需要がある。
- 若者にとって人気や話題性のあるまちの中のスポットは、若者が集まる魅力がある。「あそこなら行ってみよう」と地域へ一歩踏み出すきっかけになる。

②若者とともに取り組むこと（若者の視点を活かすこと）の意義

- 「みんなのクチコミマップ」では10代・20代の若者からの声を拾うことができた。同世代の若者からの声掛けであるからこそ、警戒感なく足を止め交流してくれたのではないかと推察される。
- 若者からアンケートをとりアイデアをもらうことで、若者のニーズに合った場を用意することができた。
- 若者が企画から参画することで、同年代の若者が楽しめるイベント内容や、居心地の良い空間をつくることができた。
- イベントの周知ポスターを若者が作成してくれたことで、同世代の若者の目に留まるデザインとなり、若者の参加者が集まった。
- 大人側も若者から新たな視点や情報を得ることも多かった。若者とともに活動することで、大人も変わることができる。
- 居場所づくりの企画を、若者と大人が対等に混ざり合って考えることができた。企画を重ねていくプロセスそのものが、若者にとっても大人にとっても居場所であると言える。

(4) 今後の取り組みに向けた考え方

商店街モデル事業の取り組みは、まちの中に世代を超えた交流の場を生み出し、若者が地域活動に参画していくしくみのモデルを示した。まちの中の居場所を継続的に運営していくため、今期の取り組みを通じて得られた成果や課題を踏まえ、今後の取り組みに向けて重要となる考え方を以下にまとめる。

～若者と地域をつなぐハブを目指して～

若者のアイデアには、地域を変える力がある。地域には、若者をサポートできる力がある。若者と地域の大人が交わる機会を増やすことで、若者の考えを吸収し、地域に参加してもらうきっかけができる。今、必要とされているのは、若者の「やりたい」と地域の力をつなぐハブの存在である。若者が心の内に持つ意欲やアイデアを、地域の中で実現していくには、「若者が地域と気軽につながることでできる場やしくみの構築」が必要である。

また、そのような場やしくみがあり、若者と地域の大人が交流し、体験をともにしていく過程の中で、信頼関係を築くことができる。そして、何気ない話や、進路や将来、家庭や友人関係について等、若者が持つ思い・悩みを話せる場になっていく。そのような人間関係を築いていくことが、地域の絆を深め、よりよい地域につながっていく。

これまでそれらを担ってきた地域でのお祭り、清掃活動、町会・自治会等への若者の参加が少なくなっている今、新しい場やしくみをつくっていくことが重要である。

①若者が参加・参画しやすいしくみづくり～オープン・ミニマム・カジュアル

若者の参加のハードルを下げ、継続的に参画したくなるカルチャーには、以下の3つの条件が有効である。

<オープンな場>

- ・学校、部活やサークル、アルバイト、遊び、就活、仕事と忙しい日々を送る若者が、いつでも出入り、出戻りができる場をつくる。多様な関わり方ができるしくみにする。
- ・若者に流行のSNS（Tik Tok、YouTube ショート等）による発信、民間の広告媒体の活用等、若者に広く確実に情報を届け、誰もがアクセスできる広報・PRを行う。

<ミニマムな範囲の設定>

- ・ミニマムなコミュニティにすることで、自分の考えや意見が反映されやすくなる。小さなことでも、自分の行動で地域を変えるという実体験を通して、自己肯定感の向上が期待できる。
- ・しもきた倶楽部は、活動範囲を下北沢に限定したことで、地域のことをより深く知ることができ地域への愛着が生まれた。

<カジュアルな雰囲気>

- ・楽しい雰囲気をつくっていく。遊びの要素を取り入れる。若者も大人も一緒に楽しむことで、世代を超えたフラットな関係性を築いていく。
- ・小さくても1人1人が具体的な役割を持って活動することで、居心地のいい居場所となる。

②地域資源・課題とのマッチング

若者の「やりたい」と地域の資源・課題を結びつけるマッチングのしくみが必要である。

- 企画のプロセスから関わるることができる既存の区内団体・NPO・企業等とマッチングすることで、若者と地域の接点を作り、互いに対等なパートナーとして活動することができる。
- 若者は、地域の多様な大人と関わることで、多様な人生経験を持つロールモデルに出会うことができる。また、団体が持つ人材、場所、広告媒体等の資源を活用できる。
- 区内団体にとっても、若者の視点を活かした地域課題の解決や、若者に事業の一役を担ってもらうきっかけを創出できる。

③大人の関わり方・役割

若者が意見を表明するためには、まずは意見形成へのサポートが必要である。

- 若者が意見を形成していく過程において、若者の思いやアイデアを引き出し、考えを整えていく手助けをすることや、安心して発言できる環境をつくることが重要である。
- 今期の取組みにおいて、大人は意識的に若者の声を聴く側に立つこと、1人1人が持つ強みや変化を積極的に伝える等の工夫を心掛けた。しもきた倶楽部の若者からは「人前で話すことは苦手だったが、大人が否定せずに話を聞いてくれたから話せた」「大人が対等に話してくれた」「若者の意見が求められていると感じ、率直に話すことができた」等の感想が聞かれた。

④「場」の持つ力の活用

「場」の選択は、若者と地域をつなぎ、取り組みを発展させるうえで重要な要素である。

- 若者に人気のスポットを会場とすることで、若者の参加のきっかけとなる。
また、区内の様々な団体が持っている場を活用することで、その場特有の強みを活かした取り組みや、新たな繋がり・出会いが生まれる。
- 一方、固定の場を確保すれば、活動や交流の拠点となり、誰でもいつでも来ることができる居場所として、地域に根差した取り組みが展開できる。商店街の一角で場を確保し、活動に商いの要素（収益性）を持たせることも有効である。
- 将来的には、下北沢での事例を他の地域へ展開していくための方法を検討する。

■■ コラム ■■

子ども・青少年協議会の区民委員になって

区民委員 岡崎 美恵子

昨年は、収束をみないコロナに加え戦争まで勃発し、「生きづらさ」は世代に関わらず共通のワードになった。その解決は世界規模で考えねばならないが、自分にできる範囲で、「若者を閉塞感から解放する新たな居場所作りが未来に繋がる」ことをイメージして委員に加わった。

私は、商店街チームの一員として「しもきた倶楽部」に入り、何度かの若者との企画会議を経て、「まち歩き」「みんなのクチコミマップ」「Hub culture #シモキタ解剖」に参加した。コロナで制限が続く中、若者有志を集める白紙の段階から引き継ぎ、これだけの企画をリアルで実現させた成果は大きいと、改めてそのチーム力を誇らしく思う。どの企画にも、とにかく楽しく参加させてもらった。この「楽しさ」は、事業を持続する上での大前提なので、成功を確信している。そして、多くの発見があった。

大人は、経験から上から目線になりがちだが、実際それは真逆で、大人の私の方が若者から教えられることが多かった。私は、厳格な昭和一桁世代に「こうあるべき」と教育され、会社でも上司には逆らえずにきたが、それでは引き継いでいるだけで、変革も進歩も望めない。孫世代は、自ら考え社会参画が出来る世の中にするべく、そのためには大人側に意識改革が求められると思う。大人は若者に対し、教育するでもなく迎合するでもなく、尊重する意識を持って接することが大切だ。また、双方に言えることだが、大人は若者を理解しようとする努力がより必要になってくる。私は、「偶有性」というワードを学んだ。「フラット」「なんとなく」は、寄り道せずに頑張ってきた者としては晴天の霹靂であったが、デジタル化や受けた教育の違いを理解しようとするれば、「偶有性」の効果は納得がいくものである。

「肩肘をはることなく、多世代、多様性を持つ人々が集える居場所が、世田谷に出来たら素敵だ」と思う。活動に参加してみて、「まだまだスタート段階ではあるが、夢ではない」と思えてきた。

■■ コラム ■■

世田谷区のあらゆる地域課題に‘若者の視点’を取り入れたい！

区民委員 藤原 由佳

平成 29 年度から 3 期、公募委員として青少年協議会の活動に参加している。1 期目は実態調査を通じ、「第三の居場所」の重要性を知り、2 期目には若者と地域をつなぐ「環境設定」に可能性を見出すことができた。今期は事業モデルの検証として、「若者×地域の大人×区」という組織を作り、若者視点で複数回のイベントを実施した。イベント自体は彼らのやりたいことを実装したものだが、若者の意欲やアイデアは大変豊かであり、こうした組織体があることによって、地域のあらゆる課題に若者の視点を取り入れていくことは十分可能であると実感した。

持続可能な活動にするために必要なのは、若者と地域（人や場）をつなぐ機能だと考える。若者の視点を地域に生かすためには、若者と対等な関係性を構築しながらファシリテーションとマッチングを担う人・組織が必要だ。しもきた倶楽部の延長で若者とオープンに集い繋がりながら、区内の人材や利用可能な場を BANK 化し、企画実現のスピードを高めていくこともできるだろう。当面は助成もしくは委託で運営し、企画によってはクラウドファンディングを実装し、実力がつけば若者が地域課題に参画する「仕事」の創出も可能かもしれない。

また若者の意欲を高める要素の一つに「場」の魅力がある。BONUS TRACK でのイベントは空間の力を大いに感じる経験となった。建設中の新庁舎では多様な区民利用を想定した空間デザインが構想されているが、うめとぴあや世田谷区立教育総合センターなど夜間の有効利用が可能な地域資源もまだまだあるだろう。今回の活動を通じ、若者と交流し協働することが素直に楽しく、大人にとっても若者にとっても有意義であったことが何より嬉しい。今後は、この活動が世田谷区の多様な課題や取り組みに若者の視点を取り入れていくことに繋がっていくことを切に願っている。そして、若者が命名した「HUB CULTURE」という活動名どおり、世田谷の若者と地域活動をつなぐハブになっていくことを期待している。

■■ コラム ■■

未来の世田谷のために

区民委員 勢能 克彦

仕事を引退した後、世田谷を「若者が力を発揮し、若者が暮らしたい・住んでみて良かったと思えるまち」にしたいという思いでこの事業に参加してきた。そのためには若者への有効な SNS 等による情報発信と、年齢・性別を問わず自然な話ができるリアルな交流の場が必要という思いが常にあった。

2年間のリアルな交流の場の実現を目指した商店街モデル事業。

「好き」なことを通しての交流の場、人生の選択肢を広げるための場として、大学生が中心となって企画し、若い社会人も参加して大いに盛り上がった。常に心に描いていたのは、「大人と若者が対等な関係で」、キーワードは「いつも明るく、そして楽しく」。

自分で考え判断し、前向きに行動できる若者、そして様々な生き方の中で将来の選択肢を模索する若者に、大人も交えたリアルな場を実現できたし、それは若者にとってのみならず、大人にとっても有意義なものであった。少なくとも私自身は刺激を受け、自らが成長できたと感じている。

生き方の選択肢、それは人の数だけある中で、その正解と評価は自分自身で決めること。長い人生においては、後悔や反省すべきことが山ほどあり、過去に戻りたいと思ったことは数限りなくあるが、成功体験やいい思い出はそれ以上にあるのだろう。

今期はモデル事業の段階ではあるが、モデル事業としては成功であったと思うし、いずれ継続的なリアルな場づくりを組織化・事業化していくことが肝要と思っている。

その場で何が生まれるか、ある意味やってみないとわからない世界ではあるものの、それが楽しみであり、大いなる可能性を秘めていると感じている。

若者が悩みながら、そして逡巡しながらも力を発揮し、自らの意見を主張して、大人とともにまち・社会を変えていける仕組み作りが、未来の世田谷のために、あるいは未来の日本のために求められているのではないだろうか。大人の一人としてそのサポートをしていきたい。

■■ コラム ■■

世田谷区子ども・青少年協議会に参加して

せたがや若者サポートステーション 奥村 啓

2年近く世田谷区子ども・青少年協議会（以下、青少協）の活動に参加させていただいた。今期の青少協は「若者ととともに変わる地域～若者の視点で」というテーマで進めてきたが、スタートした当初はそれをどのように検討し、モデル事業をどう実施していくのか、恥ずかしながら私にはピンときていなかった。特に私が参加した商店街でのモデル事業では、こういう居場所があったらいいなというぼんやりとしたものはあったものの、そこからどう具体的な形にするのかは苦戦していた。

ただ、その状況を変えてくれたのは青少協に関わってくださった若者たちだと思っていて、その若者たちが持つ居場所を作りたいという思いや豊富なアイデア、それを実現させていくための行動力が、12月に開催したボーナスストラックでの「Hub culture#シモキタ解剖」イベントという理想とする居場所の形として結実したと実感している。私は普段の仕事柄、自信を無くしてしまい自己肯定感の低い若者と会う機会があるが、人は自分が必要とされて役割があり、自分にもできることがあると実感できたら、自分のやりたいことや目標に向かって歩いていくことができるということを今回の活動を通して改めて感じる事ができた。

この若者たちが作った居場所は、彼らだけが望んでいた場所ではなく、コロナ禍で人との関わりが少なくなってしまう人、リアルな出会うつながりを求めている人など多くの人にとって必要な居場所であると思う。今後このような場所が常設化されていくよう、大人たちが若者たちの思いに添えていく必要があるし、今後の世田谷区の取り組みや施策にも「若者の視点」が多く取り入れられることを心から期待している。

■■ コラム ■■

若者と大人の絆のチカラを感じた、しもきた倶楽部の活動

『情熱せたがや、始めました。』運営委託事業者 森嶋 正巳

2022年4月に『情熱せたがや、始めました。(ねつせた!)』の事務局業務を受託し、同時に青少年協議会の委員として委嘱され、活動をさせていただくことになった。6月に初めて協議会に参加し、商店街でのモデル事業に参画させてもらうことになったが、その後実際の小委員会や活動の打合せ会議にあまり参加ができず、応援することが精一杯という状況であったのが正直なところである。

コロナ禍においては、大学生や若者がほとんどリアルな人との接触やコミュニケーションを取る機会がなくなり、キャンパスなどで多くの仲間との語らいやサークル活動などができない中、若者は自分の居場所をネット上になんとか創ろうとしていることが多くなったと実感している。ねつせた!はそんな居場所の一つであるとも実感している。

その中であって、しもきた倶楽部の活動は、若者と地域の大人が互いにリアル・オンライン問わずコミュニケーションを取り、若者が実現したい活動やイベントを「一緒に協力しあって」作り上げていく取り組みであると感じた。

12月に実施されたHub Cultureは、それまで若者と大人が建設的な意見交換や議論を通じて、地域と若者、若者と大人の絆がしっかりとあり、それぞれの役割が具現化された好例といえるだろう。協議会でも議論されたが、今後はモデル事業として一時的な活動として終えるのではなく、若者と地域、若者と大人との関係値を継続的かつ自立的に構築していくために、どんなサポートや仕組みがあればいいのか、議論や活動を実践することが大事だと思う。

最後に、青少年協議会の地域委員の方々の熱い想い、本当に若者の立場を尊重し建設的な意見を述べ、実際に活動される姿にとっても感銘を受けている。個人的に、私は世田谷区外の住人であるが、今後もその姿勢を見習い、自身の居住地域でも問題提起できるようになっていこうと思った次第だ。

手触り感のある地域へ。

特定非営利活動法人 neomura 代表理事 新井 佑

私は前期に続き、商店街での新たなモデル事業作りに携わらせていただきました。12月に行われた下北沢のBONUS TRACKで開催されたイベントは、区内、区外問わずたくさんの若者たちが集い、それぞれの想いの交換が行われていて大盛況でした。

参加アンケートの満足度も非常に高かったようで、主催した若者たちもとても思い出に残る日になったと思います。今期のテーマは『若者とともに変わる地域～若者の視点で～』ということで、何より私自身が若者たちの構想力や行動力に刺激を受けました。若者たちもこの共同体験をきっかけに、さらに自信がついたり、地域や社会とのつながりを感じられたら良いなと思っています。

私は、若者主体で構想し、行動することで何かが育まれる、そのプロセスにおいてこそ地域とつながるような場をたくさん創っていきたいと思っています。そのためには、主に3つのデザインアクションが必要だと考えています。

一つ目は、持続的な場づくり(Place)です。ふらっと無目的でも寄れて、偶有性が高まり、関わりしろが増えることで人と人がつながりやすく、その結果、精神的な拠り所としても機能します。もちろん、オンラインの場づくりも同時進行的に進めることはコミュニケーションの方法を多様化する上でとても重要だと思いますが、現状はあくまで補助的なものだと考えています。

二つ目は、手触り感(Texture)です。特に都市においては、”地域”の範囲が大きく、関わる人も多様なことから、一つのアクションへのプロセスが重層的だと感じており、地域の範囲をさらに限定したり、なるべく実行におけるプロセスをシンプルにしたり、簡略化することで若者たちに地域の手触り感を感じてもらえることが出来るでしょう。そうすれば、若者たちが抱える社会に対しての閉塞感を”地域”というユニットで打破できるかもしれません。

そして最後の三つ目は、ノリ(Play)です。若者らしく、自己表現がしやすいような心理的安全性の高いコミュニティカルチャーは、共同体験を基盤として、地域とのエンゲージメントを高めます。ただしこれらは若者主体の活動とは言え、地域との関係性が鍵になってくると思います。

若者たちが企画し、行動するその課程を温かく見守り、伴走し、時には同じ人間目線で積極的に介入することで、若者たちの想いの輪郭が描かれていく。その輪郭によって、”地域”という輪郭も見えてくるような、そんな作用を願いつつ、私自身も実践していこうと思っています。

最後にご一緒させて頂いた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

■■ コラム ■■

若者委員としての活動を通して

協定大学学生（昭和女子大学） 増田 名那

私は、大学の授業の一環として、若者の居場所作りプロジェクトである「あいりす」に携わっている。そこで、子ども・青少年協議会に、若者委員として参加しないかというお声がけをいただいた。

初めて協議会に参加したとき、たくさんの大人に囲まれ、知識も経験もない私が、本当にここにもよいのかという不安でいっぱいになった。しかしそこには、私の意見を否定せずに、寄り添って聴いてくださる大人たちがたくさんいた。また、様々な場面で発言を求められ、若者の意見が必要とされていることも実感した。

モデル事業の検討会議では、同世代の若者の意見を聞くことができ非常に刺激を受けた。そして、そこで出た意見を元に企画を作りあげていくという過程に携われたことは、大学の授業などではできない貴重な経験だったと感じている。全員で意見を出し合ってきたことが、最終的にはイベントとして形になったことで、課題や成果が目に見え、それまで活動してきた意味やこれからの活動へのモチベーションになっていた。実際に企画や運営を体験できたことで、頭で考えるだけでは気がつくことができない問題があることや、大人の方々のサポートの必要性を改めて感じることができた。また、話し合いを重ねていくことで、若者同士や大人の方々と信頼関係が築かれていき、気がつけば若者に居場所を提供するための会議の場が、自分自身の居場所にもなっていた。

2年間の活動を通して、たくさんの新しい経験をすることができ、私は自分自身を成長させることができたと感じている。自分の考えに自信を持てるようになったり、自分とは異なった考え方を知ることができたりと、たくさんの学びを得ることができた。私たちのような若者の声が必要とされていること、挑戦できる場があること、そしてそれをサポートしてくれる大人たちがいることを、もっと多くの若者に知って欲しいと思う。

■■ コラム ■■

若者目線の意見

『情熱せたがや、始めました。』メンバー 丹羽 有彩

私は「情熱せたがや、始めました。(ねつせた!)」の活動を通して委員のお話を頂きました。最初は自分にできるのだろうかと不安でしたが、学生でありながらも区のモデル事業に企画から実行まで携わり、多くの学びを得られる貴重な経験だったので、今では参加して良かったと心から思っています。

私が常に心がけていたのは、率直に語ることです。他者に好まれそうな意見を言うことは簡単ですが、本当に若者が求めていることは何か素直に伝えるように努めました。私は「ねつせた!」や「希望丘青少年交流センター(アップス)」でも活動しており、そこで得た知見を活かしながら、若者目線の率直な意見を述べるようにしています。また委員の皆さんは若者の意見を聞こう、尊重しようとしていることが伝わってきたため、発言時には安心感がありました。

しもきた倶楽部の活動では12月に「Hub culture#シモキタ解剖」を実施しました。もっと1つ1つの企画にじっくり取り組みたいと思うほど充実した時間となり、徐々に事業が形になっていくように感じました。また「校内カフェ」にも参加しました。学校に入ると生徒さんが「今日カフェの日だ!」と友人同士で喜び合い、「次はいつ来るの?」「毎日でも来て欲しい」と話してくれる様子を見ると嬉しくなりました。お菓子を食べたりゲームをしたりしながら交流できたことで、いつものアップスの活動とはまた違った経験ができて多角的な視点が得られたと思います。

このように形になった部分もたくさんありましたが、改善できる部分もあると思います。協議会や小委員会では若者が私1人しか参加していない会もあったため、今後はイベント開催などを通してさらにさまざまなバックグラウンドを持つ若者から意見を集める必要があると思います。世田谷区にはその環境が整えられているでしょう。このような活動を続けていくことで、より多くの若者に届くような活動が増えていくと思います。

■■ コラム ■■

約一年間まちに関わってみて

しもきた倶楽部メンバー 中谷 友美

しもきた倶楽部のメンバーになり一年が経とうとしていますが、会議の場が私の一つの居場所になっていると感じました。しもきた倶楽部は、多様な経験をしてきた多様な大人の方が若者に対してフラットに接してくれ、話しやすい雰囲気を作ってくださっているおかげで自分の思いを素直に話すことができます。私は人見知りもあり思ったことを発言できない場面がよくあるのですが、しもきた倶楽部では安心して言いたいことが言えます。皆が自由に発言し、一緒の目標を目指しつつ、会議の中に自分の琴線に触れる誰かの発言があったり、色々なことを考えるので自分にも気付ける、そんな素敵な場です。

そして、夏から協議会の委員になる機会をいただいたことで背景や目的などモデル事業検討の全体像を見ることができるようになりました。協議会では有意義な意見交換がされていますが、具体的なことは区の方に任せきりになってしまっているのではないかと感じたため、具体的な行動まで関わっていけたら嬉しいなと思いました。

居場所について沢山考える時間があった中で、個人的には2つ重要な要素があるのではないかと考えました。場を認知してもらうことと、その場が居場所だと思えるような空気感を作ることです。場を認知してもらうためには小さな頃から地域との密接な関わりがあることや、信頼できる大人がいることが大切ではないかと考えます。自分も含め子どもや若者は信頼している人にしか自分が本当に思っていることや感じていることを話さない傾向にあると思うので、地域の大人の方が信頼できる、気軽に話したり相談できる関係性になればよいのではないかと考えます。そして、ここが自分の居場所と思える場を地域に持つことでまちへの愛着や興味関心も生まれるのではないのでしょうか。

最後に。常より愛着を持っていた地元世田谷に何かしらの形で関わられたらなと思っていたので、このような機会をいただけて嬉しかったです。これからも活動を通して世田谷とつながり、協議会のテーマである『若者と共に変わる地域』を体現していきたいです！

3. 今後のモデル事業の展開

第2章で報告したモデル事業は、若者が意見を言いやすい場に必要要素を検証するために、子ども・青少年協議会の委員自らが試験的にチャレンジした取り組みである。

令和元年度に調査、準備して、モデル事業を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、スケジュールの変更や事業の中止、延期をせざるを得なくなった。

今期は、前期に検討した2つのモデル事業を引き継ぎ、実施することができたが、関わりをもった若者の声も十分に拾えたとは言えず、十分な検証には至らなかった。若者や関係団体、学校などと信頼関係を築きながら進めるには、ある程度の時間が必要であると感じる。

来期（令和5年－6年度）は、2つのモデル事業について、この間の取り組みにおける課題も踏まえつつ、地域が継続的・発展的に支える「若者のための第3の居場所」、「若者が意見表明できる場」または「若者の声を拾える場」のしくみづくりに向けて、今後も検討していきたい。